

学芸の森の顛末

木俣 美樹男

A circumstances of “Gakugeinomori” forest

Mikio KIMATA, FSIFEE, Tokyo Gakugei University

東京学芸大学のキャンパスや施設は前学長の意向によって6年ほど前から順次、「学芸の森」という冠が付くようになった。学芸の森環境機構、学芸の森プロジェクト、学芸の森ホール、学芸の森保育園などなどである。学芸の森環境機構の市民委員（園芸家）より提案もあり、2011年はこの「学芸の森」の理念と内実が何かを、学芸の森環境機構や生物文化多様性教材研究会において検討することにした。この議論のための資料として、この間に直接観察してきたキャンパスの学芸の森の変化について記録しておきたい。

シーン1：連雀通りから正門へ

国立大学法人になって、大きいが軽い看板が正門への入口にできた。元あった重い石の表札は道路の中央分離帯に移動されたが、交通標識に隠れてよく見えない。正門への道は小金井キャンパスを象徴する桜並木である。この樹下には色々な低木が植えられ、かなり良好に管理されていた。前学長は中国の大学で感銘を受けたということで、清々しい香りを放つロウバイをさらに樹下に補植された（図1）。密植状態が気になる。



図1. 正門通りの樹下

シーン2：正門の周辺

正門左手の二十周年記念館の周辺は、大木が枝打ちされてとても明るくなった。日本庭園も造られ、ササを刈って小道も造られ、学芸の森プロジェクトの本部が置かれるようになった。この記念館の西には弓道場がある。博物館の建設予定地であったが、弓道部の政治力が強く、博物館はできずに、素晴らしい弓道場が改築された。

その北のヒマラヤスギ並木は枝打ちされ、一時はかなり明るくなった。しかし2～3年で枝は再び茂り、樹下が暗くなったので、既に造られていたハーブ園のために大木となっていたヒマラヤスギは伐採された。キャンパスで伐採された多くの大木はベンチやテーブル、まな板にされ、膨大な量の残りはまるで遺体のように樹下に横たわっている（図2）。

シーン3：正門西の万年塀の撤去

万年塀の撤去と生け垣化は美観と防災にとって、結果からすればよかったと思う。確かに、キャンパス南の狭い道が格段に広がったように感じる。

この作業は東京都の地球温暖化対策のための



図2. 伐採した丸太

経費で、小金井市が東京学芸大学と共同で行ったものである。ただし、この作業の企画は学芸の森プロジェクト、施設課、小金井市役所、委託コンサルタント、恐らく近隣の市民が検討会を行い、実施に移されたようだ。

当初は3mもセットバックするとの議論で、また多くの木が伐採されるようであった。結果的には3mにはならなかったもので、大木は傷ついたものの、多くを伐採することはなかったもので、安心した。公道からキャンパスが見えるようになり、以前から低周波による苦情が多かった芸術館の空調が露わになり、早い機会に防音への配慮が望まれる（図3）。

シーン4：本部棟の南

本部棟にはヘチマやゴーヤのグリーンカーテンが張られ、いくぶんかの冷却効果をあげている。駐車場周辺はやはりケヤキなどが伐採され、明るくなり、ツツジなどの花木が新たに植栽された。これらは前学長が退職される年度末に実施されたことである。学長裁量経費の多くが造



図3. 芸術館の空調を学外から見る



図4. 本部棟の南、駐車場

園に使用されていたそうである（図4）。

シーン5：ケヤキ通り

時計台周辺にあつて象徴的景観を構成していたヒマラヤスギ3本をあっさり伐採して、チョウの食草が植えられた。ケヤキ並木の樹下には自生していた木々を伐採して、カエデを両側に植えた。

学長の権限と財力は絶大である。数十年間生えていた大木を何本もひとりの意思で伐採できてしまう（図5）。将来に責任が持てないのにバタフライ・ガーデンなるものができたが、いずれ雑草に被われ食草は絶えるだろう。チョウやウマノスズクサに対する「契約」はすぐに履行されなくなる。

シーン6：講義棟の周辺

講義棟東側にはナノハナが今でも咲いている。前学長出身地の掛川市民がボランティアで花壇を造って下さっていたのだという。西側には植栽されている木の枝を無残にも払って、サ

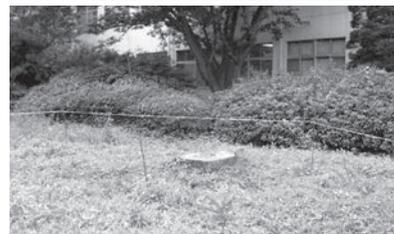


図5. 上は醜く伐られたヒマラヤスギ、下はその後再度伐採された切り株

ルズベリを植えた。美術科棟の東にはハナモモを密植した。どの場所も、現在茂っている木々を伐採ないし枝払いして、新たに花木を植えるのだが、植えすぎで、余りに密度が高く、数年で重なり合い、植えたものを伐採せねばならないとみられる（図6）。

シーン7：万葉池の周辺

この周辺は自生の木々が茂り、大学院棟を立てる候補地になったところである。文部科学省の予算もついていたのに、教授会の議論でこの場所の木々を守るために、大学院棟は立てないと議決したところである。ちなみに、お陰様でいまだに連合大学院学校教育学研究科も大学院教育学研究科も独自の建物を有していない。

ところが、この場所の木々もすっかり伐採されて、万葉池の周辺は明るくなり、テーブルやベンチも置かれるようになった。国立大学法人の学長権限は絶大で、教授会での議決は何であったのかと思うのである（図7）。



図6. 茂っている木の枝を払って、サルズベリを密植している

シーン8：イチョウ並木と野球場の南土手

野球場の土手にはアジサイが植えられた。全て購入して植栽されるので、大学所属の植物学者として情けないと思い、学生たちと挿し木してアジサイとツバキの苗木を育てることを前学長に提案した。前学長も一緒にいくつかの植物園に同伴くださり、剪定枝を分けて頂き、挿し木して増殖し、今では多くの苗がよく育ち、開花している。ちなみに、ツバキは華道の安達瞳子評議委員がお好きだったので、ツバキ園を造るように下命を受けたのである。実際には、ボイラー室の南にツバキを植栽した。

イチョウ並木はよく育ち、密植状態になっていたので、数本が伐採され、材はまな板にされた。学園祭で販売されたようである。総合教育研究所を建設する予定の場所は多目的広場になり、子どもたちがプレーパークとして集っている。学芸大学の性格からして、子どもが遊びに来ることは悪いことではないが、事故などの対応には配慮がいる。

また、気になるのは、突然、何の必然性も水



図7. 万葉池の周辺、伐採した木で作ったテーブルとイス



図8. 水車公園

場もないところに、寄附を受けて作った「水車」ができ、単に回っていることである。水辺公園などと称されているが、実用的に粉を挽くでもなく、学習に活用もされずに、知性を感じえない設定に見えた（図8）。

シーン9：柔道場の東

花木の苗木があった苗圃を前副学長らがボタン園にし、この奥にコココーラ教育・環境財団の寄附による若草研究室を置いた。すでに環境教育実践施設があるので、環境教育センターと命名することには賛成できなかった。そこで、校歌からとって若草研究室としたのであろう。

苗圃を失くして良かったのであろうか。附属小中学生の登校時以外は人気のないこの場所に、小さな研究室を造った意味がいまだに不明である。できたてではあったが、学芸の森環境機構はマスタープランに基づき、キャンパスづくりにもっと公開の論議を進めるべきであった（図9）。

シーン10：サークル棟の西北

学生たちのサークルが入っている建物の西北はキャンパス内唯一のまとまった常緑樹林で、実習で自然観察などをしてきた。しかしながら、若干うす暗い森で、学生たちがごみの捨て場所にしてきた。

学芸の森環境機構で検討もし、現状保全（植物学、地理学、独語の教授ほか）と伐採（前学長、心理学の教授）の両論があった。この間、学生自治会に何度も話し合いを求め、最もごみを出

している演劇部にも意見を求め続けてきたが、話し合いには忙しいとのことで、一向に応じてもらえなかった。

昨夏には学生自治会の金庫が盗まれ、この林に捨てられていたと聞き及んだ。心理学の教授からは女子学生が恐怖心をもつので、伐採すべきだとの意見を強く受け、学生課も犯罪の温床になることを恐れて整備を求めた。施設課の予算で、年度末に整備することに賛成し、作業をしてもらったが、結果的には多数の木を伐採して、すべての林床植物まで除去して更地にしてしまった。がれきやごみが多く、やむを得ない作業だと、保全の意見の方々にも納得するように求めた。伐採の意見の方は強い主張であったにもかかわらず、当然のこととして、かなりクールな受け止め方であった。植物の痛みは想像の埒外なのだろうか。

修復は学校園の講義で受講学生と共に行う計画でいた。ところが、演劇部は約束に反し、資材を片付けないばかりか、さらに廃材を放置、かつ捨てたので、冷蔵庫や扇風機など家庭電気製品が捨てられるようになった。人の心を演じるのが演劇ならば、やむを得ずに木々を伐った人の心や植物の心を全く意に介さず、さらにごみを捨て続ける演劇部は悪徳業者ならぬ悪徳学生である。演劇の練習をしている学生たちをとらえて、まずは聞いてみた。3グループあるそうで、聞いたグループは絶対に投棄はしておらず、劇団猿がしているのだという。事実、新しい廃材から劇団猿とマジックで書かれた物的証拠が出てきた（図10）。



図9. 苗圃跡のボタン園



図10. 再びゴミ捨て場に・・・はさせない

閑話休題。国籍のみ日本人の礼節のなさには
どれだけ生命の危険を感じたことだろうか。今
の若者だけではなく、それ以上に今の中高年は
余りに礼節が低い。未曾有の大地震、大津波、
原子力発電所による放射性物質公害が続く中
で、本当に心からの反省に基づいて、深く学習
をしなければ、このくには一層奈落の底に落ち

るだろう。

過去の日本人を賛美していても仕方ないこと
で、現在にこそ、高い志をもった市民に自らを
育てなければ、復旧、復興、ましてや再生など
はあり得ない。三省せよ、「日本人」。日本文化
を学び、日本市民になろう、である。